

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 佐藤 由紀

ジェスチャー(手振り)は、心理学、社会学、文化人類学など多くの領域で研究が行われている学際的な主題である。本論文では、言語学と認知科学、心理学を横断して、とくに「発話に伴うジェスチャー」(話者が無自覚に行う、発話と関連するあらゆる手の動き。発話内容を視覚的に表現する成分、比喩的表現の成分、指示、発話のリズムに同期するビートなどに分類される)についての研究を開拓してきたシカゴ大学のD.マクニールの枠組みを用いて研究が進められている。

発話に伴うジェスチャーが、発達の早期(3歳以前)に失明した者にも見られるかどうか、すなわちこの種のジェスチャーの出現に、他者を視覚的に観察する経験、視覚的なコミュニケーションが必須であるか否かについては、研究結果が分かれており、議論がある。本論文の前半ではまずこの問題が扱われている。論文の後半では、単独(一人芝居)でありながら、複数の者によるインタラクションや、舞台上には実在しない環境への志向性を演ずる俳優イッセー尾形氏の演技過程を対象として、この極めて特殊な状況下の話者に現れる発話に伴うジェスチャーの性質を、ここではA.ケンドンの手振りの空間構造分析の手法を援用して検討している。論文は4部9章から構成されている。

第1部1章では、まずダーウィン以来のジェスチャーの研究史を広く概観し、発話に伴うジェスチャー研究が開始された背景、経緯が示され、本論文が概念枠組みと方法をそこに依拠した、ケンドンとマクニールの研究が紹介されている。さらに、本論文に先行して早期失明者と俳優を対象としたジェスチャー研究が展望されている。

第2部の3つの章では、発話に伴うジェスチャーについて、早期失明者にはそれが見られないとした佐々木(1993)の研究を下敷きとして用い、構造カテゴリーカルアプローチやビートのリズム分析を付加して再分析している。まず、ジェスチャーの出現頻度、その個人差や、説明課題ごとのジェスチャーカテゴリー種数などでは、早期失明者と晴眼者に共通性が示され、発達早期に失明した者にも発話に伴うジェスチャーが見られることを示している。ただし、アイコンニック(絵的表現)がまれである、動きはきわめて小さい、手のかたちがほぼ閉じているなどの点で、早期失明者のこの種のジェスチャーのあらわれが晴眼者のそれとは大きく異なることも示されている。ただし時間構造分析は、ビートのリズム特性や、ジェスチャーと発話との時系列的関係が二つの群で同質であることを強く示唆した。これらの結果から、視覚経験がなくとも発話に伴うジェスチャーはあらわれる。ただし、そのあらわれかたや発達には、視覚経験が大きく影響すると結論されている。第2部で得られた知見は、早期失明者における発話に伴うジェスチャーの有無についての議論に新たな事実を提供するとともに

に、2つの立場を発達的に統合する観点を提供したものであり、独自性が認められる。

第3部の4つの章では、対象とした俳優の一人芝居の作劇法、ここでの分析の理論的枠組みとした、「特定性」の概念が、生態心理学から導入されている。分析では一人芝居の発話構造を会話分析のエスノメソドロジー的記法も援用して分析し、視線とジェスチャーが舞台上に実際には無い環境を秩序だてて指示するために重要な役割を担っていたことを示している。さらにこの俳優と普通説明場面での成人男性の発話構造を比較して、同一性と異なりを示している。俳優のジェスチャーは、平均持続時間、出現位置や方向、ビートのリズム性、空間構造、発話との時系列関係などでは成人男性と共通であったとされている。ただし一つのジェスチャーに含まれるジェスチャー句数が少ないなど、特殊性も見られたとしている。とくに俳優の特徴として、指さしを多用することに注目し、架空の対話相手と、状況に向けられた意図の複合した表現が、ここにみられた指示の意味であった可能性が議論されている。最後にこうした指示の複雑性が、この俳優の演技の熟達化を示す特徴である可能性が述べられている。これまで発話に伴うジェスチャーは、発達初期の幼児の日常場面や、映像の内容の想起課題を与えられるといった限定された場面で、身体の挙動については無自覚であると考えられる対象者を用いて検討されてきた。第3部では、この種のジェスチャーが、他の演技者との相互作用を欠いた状況で、自身の身体を自覚的に制御しているはずの演技者に於いても現れることを確認している。さらに空間的構造や、発話と絡む時間的推移の分析に示された普通成人との同一性という結果は、この種のジェスチャーが多くの状況や対象者を横断して、普遍性をもつ可能性を示唆している。第3部の結果はこの点で独自の事実と観点を含んでいる。

第4部では総括的議論を行い、早期失明者や一人芝居の俳優というような、特別な対象者においても、発話に伴うジェスチャーが類似のあらわれをすることから、この種のジェスチャーが発話場面や対象を横断して、頑強に出現する本性をもつ可能性が示唆されたとしている。ただし発達（経験）や対話場面が、そのあらわれに多様性を導くことから、発話に伴うジェスチャーには、出現過程の個別機会に制約される性質も合わせもつことが示されたとしている。

発話に伴うジェスチャーは、マクニールによって「意味を形態と運動に内包した身体の動き」と定義されてきたが、本論文の結果は、それが他者（発話相手）や周囲の環境との関連を保ちながら、その都度具現する身体に深く根ざしたコミュニケーション行為である可能性を示唆している。本論文には、例えば、早期失明者と、単独で演技する俳優から得られた二つの事実を、発話に伴うジェスチャーの出現過程における「他者性」の概念の下に統合するなど、将来の課題も指摘されたが、審査委員会は、現在、多くの領域で注目されている発話に伴うジェスチャーについて、これまでとは異なる対象を設定して、複数の新しい知見を示したことを、本論文の独自性と認める点で意見の一致をみた。よって本審査委員会は、本論文が博士（学際情報学）の学位に相当するものと判断する。